

アラン・ブース著

大学入試英語批判

HELL!

訳 : 山本哲也
真崎良幸

★日本は英語の通じる国？

今日のお話にはふた通りの始めかたがありますが、先程までどちらにしようか迷っていました。午前中は久留米商業が甲子園で準決勝まで勝ち進みましてのでテレビから目が離せず決心がつかないままでした。そこでイントロを二回やることにしましょう。一回目は地図の話です。

十三年前に初めて日本にやって来て私が何をしたかお話しいたしましょう。記念日に興味を持っている方に参考のため申しますが、明日できっかり十三年になります。ここの教会の僧侶の方から十三という数は縁起の良い数だときいたのですが、皆さんもご存知のように、西洋では十三は大変不吉な数字です。それで明日何が起こるのか不安な気持ちでいるわけです。それはともかく、初めて日本に来て英語を教えたとき、私は、教室に世界地図を掛けることにしました。地図で確認することで学生に少しでも外国を実感する機会を与えたかったわけです。そこで、小さな本屋さんへ行って日本で出版された世界地図を買いました。家に持ち帰り、ひろげてみると奇妙なことに気づきました。

第一に気づいたことは、その日本製の世界地図には、真ん中に日本があり、

右にアメリカ、左にアジアがあるのです。英国製の「正統な」世界地図をご覧くださいになればわかるのですが、中心にあるのは「大英帝国」で、左にアメリカ、右にアジアが控えているのです。英国人の私にとっては、大変変わった地図だったので、こんな大きな誤りのあるのは教材として使うわけにはいかないなと思いました。

しかし、この世界地図にはもっと奇妙なことがありました。地図上に赤で塗られている国があるのです。英国製の世界地図にも赤で塗られた国はありますが、それは、昔、「大英帝国」の植民地だった国々です。(今では共和国と呼ぶことになっています。)実際、ほとんどの英国製の世界地図では、これらの国々は赤というよりはピンクに近い色で塗られています。これは、英国の印刷屋に赤インクが品切れになったためなのか、「大英帝国」がもはや昔の栄光を失ってしまったためなのかわかりませんが、ともかく、日本製の世界地図上の赤色の国は種類を異にしているのです。地図の下に書いてある記号の説明を読むと、赤色の国は「英語が通じる国」だとあります。

さて、この赤色の国々がどこかおわかりになりますか。うれしいことに、英国は、片隅に追いやられていたにもかかわらず赤色でした。ここに参加されているアメリカ人の方もご安心ください。アメリカも赤でした。カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、さらにインドやマレーシアのような旧大英帝国の植民地だった所も赤でした。しかし、英国とアイルランドを除くすべてのヨーロッパの国々は赤ではありません。すなわち、この地図の出版社によれば、ドイツ、オランダ、デンマーク、スウェーデン等の西ヨーロッパの国々は英語が通じないというわけです。同様に、インドとマレーシア、さらに英国と歴史的に関係のあるシンガポールや香港以外のほとんどのアジアの国々は赤色ではありませんでした。たとえば、韓国やタイは薄緑色でした。すなわち英語が通じない国がそうです。しかし、(次に何が来るのかももうおわかりですね。)地図のど真ん中に、深紅に映える日本が鎮座しているではありませんか。英語の通じる国、「大日本帝国」だそうなんです。

これが第一回目の始まりです。さて、第二回目、――。こんどは、雑誌の記事

の引用で始めたいと思います。この記事は「ウインズ」という雑誌に載ったものです。八月号（一九八三年）のカバーにはミッキーマウスの絵がのっていますが、真面目な雑誌です。日本航空の国際線の機内誌で、記事はオーストラリアの国際経営学の教授が書いたものです。「日本人の英会話力」という題がついていました。イラストに「見ざる、言わざる、聞かざる」の三匹の猿が描いてありますが、この猿はガイジンを表わしているのか、日本人を表わしているのか、はたまた、國弘正雄氏みたいな同時通訳者を表わしているのか私にはわかりません。それはともかく、最初の数行を紹介してみましょう。

「英語を母国語としない先進国の中で、日本人の英語が一番下手である。日本人は高校まで、六年間英語の勉強をして、大学や社会に出たあとも勉強を続ける人が多いのに『普通に』しゃべれる人の数は全人口の一パーセントにすぎない」

★英語も日本語も通じない！

どちらの始め方がお気に召しますか。私はどちらか一つを選ぶというよりも両方を比較してみたいと思うのです。この二つのエピソードは、日本人の英語の能力について全く正反対のことを言っています。地図の出版社は、日本は英語の通じる国だと言い、一方、オーストラリアの教授は、英語が「普通に」しゃべれる人が日本は全人口の一パーセントしかいないと言うのです。講演が終わったら、参加されている外国人に、どちらが正しいのか聞いてみてください。私は在日十三年の間、東京に住み、日本全国津々浦々まで旅行しましたが、私の経験では、日本は決して「英語の通じる国」だとはいえません。

昨日、夕食後、國弘氏と雑談をしていたとき、國弘氏は、私の在日十三年間で日本人の英語力が向上したことを認めよ、と「強迫」されましたが、私はガンとして拒否しましたので、國弘氏は罵詈雑言をはき、最後には「イギリス人の頑固者」呼ばわりされました。ここでもう一度繰り返しますが、私の経験で

は、日本は英語で正常な生活ができる国ではないと断言できます。日本以外のアジアの国を旅行した友人の話では、ジャカルタ、バンコク、ソウルのような都市でタクシーの運転手に英語で話しかけても十分に通じるそうです。東京ではほとんど通じません。もっとひどいときは、私が日本語でしゃべっても通じないのです。十三年前に初めて日本に来たときにはガイジンの姿を見ただけで逃げてしまうタクシーばかりでした。私はタクシーの運転手をつかまえて問い正しました。「おい、日本の運転手はガイジンを見ると逃げるのはどうしたことだ」「それはね、英語がわからんからよ」という返事が返ってきました。これでもおわかりのように、さきの日本の出版社はいささか楽天的すぎるような気がします。

★英語はしゃべれないが読める？

さて、皆さんは英語の教師でいらっしゃるので“speak”と“understand”の違いはよくご存じでしょうが、この地図の出版社は、

Japan is a country where English is *spoken*.

(日本は英語が「話される」国だ)

と言っているわけではありません。

Japan is a country where English is *understood*.

(日本は英語が「理解される」国だ)

と言っているのです。私はこの違いを指摘する日本人によくでくわすのですが、彼らはこう言うのです。「われわれ日本人は英語はしゃべれないが、読めるのだ」、あるいは「理解できるのだ」。私の経験から申しますと、これらもまた嘘っぱちです。これは、できないことの言い訳をしているにすぎないのではないで

しょうか。イギリス英語とアメリカ英語の違いを日本人が語るときも同じような議論が展開します。バーに入って座っていると隣の人が言います。

「お国はどちらで？」

「イギリスです」

相手は間髪をいれずに、

「じゃあ、あなたに英語をしゃべってもむだですな。あなたの英語はイギリス英語、私の英語はアメリカ英語ですからな。あははは」

この「あははは」は、余裕というより一種の煙幕の笑いなのでしょう。私は意地悪をしたいときにはこう反論してやります。

「あなたの英語はアメリカ英語なんかじゃありませんよ。それが英語といえるのなら、日の丸英語じゃないでしょうか」

もっと意地悪したいときには何と言うかだって？

「アンタの英語は*Pidgin English* (はちゃめちゃ英語) だよ」

しかし今ではもうこんな言い方はやめております。と申しますのも、こんな経験があるからです。数年前、「ハトリ」という教授と一緒にラジオの英語番組を担当しておりました。「ハトリ」教授のフルネームの最初の漢字は「鳩」でした。教授が、番組の題を何にしようかと迷って、相棒の私に尋ねてきましたので、私は答えました。

「教授のお名前が『ハトリ』ですので*Pigeon English* (鳩めちゃ英語) はどうでしょう」

教授はカンカンになって怒りました。こういうわけで今ではもうこの表現を使うことはやめております。

しかし、なぜこのように二つの両極端な態度が存在するのかを考えることは意義あることだと思のです。日本の地図の出版社は、なぜ日本を「英語が通じる国」だと思ったのでしょうか。私には理由がわかるような気がします。

★英語教育の六年間

日本は世界一文盲率の低い国だといわれています。これは、特に日本の新聞でよくいわれることですが、当たっているかもしれません。しかし、いったい文字が読めるという定義をどのように考えているのでしょうか。たとえば、名前や住所が読めて書けるということなのでしょう。それとも、新聞が読めるということでしょうか。もしそうならば、どの新聞のことを言うのでしょうか。あるいは、たとえば、三島由紀夫の小説がすらすら読めるということでしょうか。読み書きができるといってもいろんな段階があるので、日本の政府はいったいどういう定義をしているのかと思って、総理府に手紙を書いたことがあります。相手が総理府だから正直で完ぺきな回答がもらえるだろうと思っていましたが、私が受け取ったのは学校の授業の出席率を示したたくさんの資料でした。もちろん文字が読めるということと授業に出ていることとは無関係ではないでしょう。英語の能力と出席率が無関係ではないのと同じようにね。しかし同一視はできないのです。英語に、

You may take a horse to the water, but you can't make him drink.

(馬を水辺に導くことはできるが、馬にその気がなければ水を飲ませることはできない)

という諺がありますが、同様に、子どもを六年間机に座らせることは出来ても英語ができるようになる保証はどこにもありません。しかし、出版社が、日本は英語の通じる国だと言った理由はよくわかります。オーストラリアの教授が指摘するように、日本人の大部分の人たちは少なくとも三年、一般には六年、さらに大学を卒業すれば十年の英語教育を受けるわけですが、この事実からでも、この期間に英語の力がついたと考えるのはしごく当然のことだからです。

★これでいいのか大学入試問題

多くの人は六年間の英語教育の成果をみて、たいした力はないという結論に達するようです。みんな問うのです。「なぜだろうか。六年間も子どもは学校で英語を習うのに。週三時間（十分な時間ではないかもしれませんが、ともかくやっています）の英語をやっているのに、卒業しても役に立つ英語ができる人は一握りにすぎない」と。

教育論議をする時の一つの問題はみんなが責任転嫁をするということです。親は教師の責任だと言い、教師は親のしつけが悪いと言う。校長は日教組のせいにして、日教組は文部省が悪いと言う。文部大臣はアメリカの占領軍が悪いと言っています。今年の三月に瀬戸山文部大臣は、校内暴力が吹き荒れる原因を占領軍のためだと言いました。現在の日本の問題の責任を三十一年前に終わった歴史上の一事件に転嫁するのは瀬戸山氏のずるがしこい政治的発言でしょう。結局はアメリカの占領をどうすることもできませんでした。もう終わってしまったことですから。しかし、もし、イギリス人のように意地悪な人がいて、現在の校内暴力は学校の受験制度に問題があるのでは、と指摘されれば、瀬戸山氏も責任の一端を担うべきでしょう。もっとも彼はそんなことをするような人ではないようですが。

しかしながら、この教育問題の責任転嫁のゲームの中で入試英語の質の悪さを批判する人は多いものです。そこで本題の大学入試の話をしたと思います。ここでお断りしておきますが、私は、皆さんのような英語の先生ではありません。毎日の生活で入試と関わっているわけではないのです。ですから、私の受験英語批判に少しでも建設的なものがあるとすれば、それは客観性ではないかと思えます。今日の講演の準備として私は「全国大学入試問題」という本を購入しました。これは実に恐ろしい本です。四百五十ページもある分厚い本で、今年の大学入試問題がおさめられています。私は全部の問題に目を通しましたが、まず最初の印象といえば、よくも精神病院に送り込まれないでこの会場までこれたなあという気持ちです。

★自己表現の欠如

さて、試験の方法やその結果、さらに治療法などを述べる前に、この入試問題を検討した所見を二、三お話ししましょう。

一番ショックだったことは、受験生に英語で表現することを要求する問題が一つもなかったという事実です。得点を取るために、考えや所見を述べたり、受験生自身のことを英語で表現することは一切ないのです。たとえば、受験生が英語で自分の生活や自分の考えを書くようなことはありません。学生の頃、私は、イギリスで外国語を学んだ経験がありますが、イギリスには、いわゆるOレベルとAレベルの二種類の試験があります。OというのはOrdinaryの略で、AはAdvancedの略です。このAレベルの試験が日本の大学入試に相当するものです。しかし、Oレベルの試験（大学入試より二年早く受ける試験）の時ですら、たとえば、フランス語の試験を受ける者はフランス語で短いエッセイを書かされるのです。論文のようなものを要求されるではありません。朝食に何を食べたとか、家族のこととか、好きな書物とかいった日常生活のことについて書けばよいのです。長い論文など書く必要はありません。はじめがあり本文があり結びがあるといった単純に構成されたものでよいのです。私の学生時代は、外国語の試験というものは、少なくとも、自分の意見や人生観を、該当する外国語で表現することを要求するものでなければ、たいした意味を持たないというのが常識でした。たしかに、フランス語の試験の大部分は翻訳でしたが、日本と違う点は、イギリスでは一部を訳すのではなく全訳させられるのです。全体の流れがわかるように長い文章を訳すのです。日本では全体の意味とは特に関係のない下線部訳を要求されるようです。

★翻訳の能力とは

翻訳が言語能力を計る良い方法ではないという意見は多いものです。翻訳の能力は「英会話」の技量とは同じものではありません。全く異なった訓練を必

要とする能力なのです。英文仏訳はつまるところ英語の問題ではなくフランス語の問題だといわれています。皆さんの母国語がフランス語だった場合、英語からフランス語に訳す作業は英語の語いや文法やニュアンスの問題というよりも、フランス語でそれらをどう表現したらよいかという問題なのです。すなわち、外国語で表現されているものをいかに効果的に、かつ、正確に母国語で表わせるかという問題なのです。私も翻訳の仕事をやることがありますが、これは間違いないことだといえます。私の日本語はプロの翻訳家といえるほどのレベルには達していませんが、ほとんど日本語に不自由していません。しかし、難しいところは、日本語の概念を母国語（英語）でどんな表現にしたらよいかというところにあります。同じように、ここにある大学入試問題の中で、英語を日本語に翻訳する問題はすべて、英語の能力を計る試験というよりも日本語の能力を計る試験といえるものです。そこで、翻訳が日本の高校のカリキュラムあるいは入試制度に組み込まれるべきか否かは議題の一つになるのではないかと思います。

★知能指数の意味するもの

もう一つ入試問題を調べてみて驚いたことは、日本人は世界一とはいわないまでも、一、二を争う知能指数をもつ国民だという、新聞で（特に日本の新聞で）よく引用される統計があることです。この意味を正しく理解することが大切だと思うのです。

知能テストを受けたことのある人はご存知でしょうが、知能テストとは、論理的、機械的、数学的な方法で問題解決を計るテストなのです。私は日本人の問題解決の早さには敬服しております。現存の技術を産業や社会の要求に応じて応用する際の問題解決の能力は万人が認めるものです。この観点からすれば、日本人は世界最高の知能指数を有する国民だといってもよいのでしょうか。私は知能テストの成績は最低でしょう。しかし、仲間がいるので安心するのですが、シェークスピアにしてもラシーヌやドストエフスキーにしても知能テストは、

苦手だったはずで。知能テストというのは部分的な能力しか計ることはできません。ある具体的な状況の中での問題解決能力を計るのです。私はこの入試問題を検討した結論として、日本の入試問題は、ちょうど数学の方程式を解くと同じように、機械的なやり方で問題解決を計ることを要求する問題で構成されているといわざるを得ないのです。

私達が使う言葉の何パーセントが機械的な方法で問題解決をしているのかはここではっきりと申せませんが、明らかに部分的にはそういうところもあります。文章を作ることはある種の問題解決を意味していますが、そのとき私たちは書物やまわりの環境から、あるいは学校で学んだ文法や語法を駆使しているわけです。しかし、言葉を使うときに機械的な問題解決だけが大きな役割を果たすとはいえないのです。これはたまたま英語を母国語とする私、あるいは日本語を母国語とする皆さん方が無意識のうちにやっていることなのです。われわれは言葉をしゃべるときに意識して頭の中で問題解決をしているわけではありません。そのかわりにある種の技量を身につけているのです。これは表現力という技量で、一人一人が感と経験によって身につけるものであり、機械的、数字的な方法によってできるものではありません。こういう技量が日本の入学試験で問題にされないことは事実なのです。言葉をできるだけ、知能テストのような機械的な問題解決の形にしてしまっているのです。日本人は、特に機械的な問題解決が得意で、知能指数がかなり高いので、試験官も受験生もこの種の問題に慣れ親しんで、別れが辛いのかもしれません。しかし、ここで考えたいことは、いったいこの種の問題解決が語学の能力を正しく評価する手段といえるのか、ということです。

★主題の抽象性

もう一つコメントしたいことに主題の問題があります。特に長文読解に関してですが、受験生は長文を読んで設問に答えることを要求されます。下線部を説明したり、訳したり、()の中に語を入れたりするのです。ここで大学入試問

題から六個所の英文を引用しまして主題についての私の所見を述べたいと思います。

まず山形大学の今年の入試問題からの一節です。

“No one denies that language and thought are related. The question is how and how closely. The ultimate in closeness was claimed by a now out-moded school of psychology which held that thinking is merely talking to oneself, in an implicit sub-vocal way. The opposite view was expressed by W.D. Whitney a century ago:

‘Language is the spoken means whereby thought is communicated, and it is only that’ — thoughts are generated in their own sphere and then formulated in language. A more comfortable position is somewhere between the two extremes.”

次の例は大阪女子大の問題です。

“When we talk about intelligence, we do not mean the ability to get a good score on a certain kind of test, or even the ability to do well in school: these are at best only indicators of something larger, deeper, and far more important. By intelligence we mean a style of life, a way of behaving in various situations, and particularly in new, strange and perplexing situations. The true test of intelligence is not how much we know how to do, but how we behave when we don’t know what to do.”

三番目の例は同志社大学の法学部の問題です。

“However one tries to define organization one is likely to find that

the definition is inadequate. Is organization a collection of individual units that are able to act as a single unit?...

“We can define organization as a set of relationships which enable individual units to act together for a purpose...”

“We end up by saying that an organization is an organized collection of individual units: in other words a large unit is created by the organization of the individual units.”

一読しただけで意味がはっきりおわかりになる方がいらっしゃるでしょうか。はっきり申しまして私にもよくわかりません。私がここで申しあげたいのは入試問題にとられている文章の「主題」についてです。最後の文章を例にとって説明いたしましょう。

この金沢大学の問題の文章の特徴は、ここに出てくるすべての名詞が抽象概念を表わすものだという事です。ご覧ください。

class (階級), kind (種類), fact (事実) phenomenon (現象), behavior (行動)

さらに私が例にあげましたすべての文章の主題も全く抽象的なものです。順に主題をみていきますと、「言語」、「知性」、「組織」、「社会」、「概念」といったぐあいです。ここで使われている英語自体が入試問題として適当かどうかを述べるつもりはありません。英語それ自体としては全然問題のないものです。しかし、私が気にかかるのは抽象概念の強調です。もし英語教育の目的が、日常生活で英語を使えるようにするというのであれば、さらに、中高生の年齢が十二歳から十八歳だということを考慮に入れば、「行動」とか「組織」といった抽象概念は語学教育の中では最も縁遠いものではないでしょうか。日常の英会話が入試問題ではほとんど問題にされないことは驚くべきことです。私があげました例は数少ないのですがこれらの例は典型的なものだと断言できます。大学

入試に合格させるために頑張っている先生方は、この種の抽象的で難解な英文を解説していくことだけしか頭の中になのでしょうか。

★時代離れの英語

長文読解の形式について最後に申しあげたいことは、文章が古いということです。はっきりと何年の文章だとはいいたくないのですが、まちがいでなく、これらは戦前の文章です。四、五十年前はこの種の英語やこの種の抽象的な随筆がはやっていました。文体に敏感な人ならこの文章を読むとき、ある種の古さを感じるはずですが、一つ具体例をあげましょう。東京医科歯科大学の入試問題ですが、ここで問題にするのは主題ではありません。次のような文章がありません。

“Of all the terrifying circumstances to which one’s home is undefended, nothing equals that of a guest who stares straight at one’s bookshelves. It is not the judgemental possibility that is frightening: the fact that one’s tastes are exposed by his books. Indeed, most people would much prefer to see the guest first scan, then peer and turn away in boredom or disapproval.”

この文章の中でjudgemental possibilityに下線が引いてあります。設問は十八歳の受験生にこの句の定義を日本語で求めるのです。この講演が終わったら、ためしに、ここに参加している外国人に、この表現を今まで自分で何回使ったことがあるのかきいてみてください。私は、今ここではっきりと申しませんが、今までに一度も使ったことはありません。実際、このような表現はなるべく避けるようにしています。理由は単に古臭い表現だからというだけではなく専門語のにおいがするからです。何か鼻に突く似非学者の専門語みたいに感じるのです。私は一度も使ったことはありませんが、ここにいらっしゃるア

アメリカ人の方は使われたことがおありになるかもしれません。もしかしたら、アメリカの慣用表現なのかもしれません。(もちろんそんなことはないはずですが。)

日本の英語教育の現状をみますと、古い英語というのは、特にショックというわけではありません。先日、誰かが話していたのですが、近代英文学はオスカー・ワイルドに始まるとある有名な日本の英文学者がいったそうです。私の感じでは、大多数の日本の大学教授は、近代文学が終わるのがオスカー・ワイルドだと思っているようです。ワイルド以降の急速な近代化の中での彼らのヒーローはサマーセット・モームやグレアム・グリーンのような自由主義者にとって代わるのです。私はひとから好きな作家は誰かときかれるとき、正直に返事をするのをためらってしまうのです。それは私が正直に答えてもこの質問者はその作家の名前を知らないのですから。たとえばアントニー・バージェスの名前をあげればきいたことのある人はいるかもしれません。それは彼の有名な作品「時計仕掛けのオレンジ」が映画化され高い評価を得たからです。しかし、もし、たとえば、日本の芥川賞に匹敵するBooker Prizeを授賞したすばらしい作品、“*The White Hotel*”を書いたディー・エム・トマスや、ブルーストの“A la Recherche du Temps Perdu”(失われし時を求めて)に匹敵するといわれる傑作、“*A Dance to the Music of Time*”を書いたアントニー・パウエルの名前を出しても返ってくるのはげげんな表情だけでしょう。とにかく、日本人が一般に古い英語を勉強しているということと入試制度とのあいだにはおそくならぬ関わりがあるといえましょう。

★客観テストの欠陥

内容に関する一般的な所見はこれくらいにして、この入試問題が受験生の語学力をテストする方法についての考えを述べたいと思います。昨日、國弘氏はコンピューターが同時通訳者や翻訳者にとって代わる時代が来るかも知れないということをお話されました。この試験問題を見ただけでもすでに試験官は不要

だということがわかります。この種の試験を採点するのに試験官は必要ないのです。たしかに、エッセイなどを書くことが要求されない一つの理由は、エッセイの質を評価できるコンピューターが今のところないからでしょう。だからこそ入試問題のほとんどが〇×式の客観問題となるのです。この〇×式の問題がアメリカでどれほど語学の試験の標準的なテストと考えられているのかわかりませんが、イギリスでは今までそんなことはありませんでした。この種のテストは信頼性が薄いのです。それはまぐれで当たることもしばしばあるのですから、全然英語がわからない人でも、解答に四つの選択肢があれば二十五%の正当率が見込めるわけです。もちろん、日本で〇×式の客観問題が主流を占めるのは受験生の莫大な数と、教師や試験官の精神構造がコンピューターの登場を求め、採点を任せようとするからです。しかし、ここで疑問点をあげれば、〇×式客観テストが本当の語学能力をどれくらい正確に評価できるかということです。

たとえばダンスを例に考えてみてください。古典バレエでも、日本舞踊でもブレイク・ダンスでもそれぞれ一定の型というものがあります。語学学習にも基本的な機械的練習——型といういい方をしてもいいのですが——があります。ダンスにも基本の型として機械的に習得する部分があります。しかしダンスはこれだけではないことはみなさんご存知のとおりです。ダンスではこの基本の型を総合して一つの統一体を作りあげるのです。これは一種の感です。たとえば、ダンサーを途中で止めて、「すみませんが、そこのところをもう一度お願いします」と言っても、できない相談です。少なくともダンスの途中ではできません。ここでも感と経験がものを言うのです。今度は皆さんがダンサーに、「ダンス大会に出場してください」と言ったとしましょう。ダンサーは、「うん、やりましょう」と言って、皆さんが、「この大会の審査はコンピューターによってなされます」と言ったとしたら、ダンサーはどんな返事をするのでしょうか。たしかにコンピューターでもダンサーの演技の基本的な技術を見分けることは可能でしょう。しかし、総合的な能力を判断することはとうてい無理な話です。みなさんはカラオケがお好きですか。(私は好きかどうかは言わないこと

にします。今夜のディナー・パーティーで下手な歌を歌わされるかもしれないからです) 東京でカラオケ・バーに行くと歌の審査をするコンピューターが設置されています。ここで歌を聞いて私がうまいと思った人はいつもコンピューターの評価が低く、逆に耳をつんざく騒音のような歌は満点に近い得点を表示するのです。このわけは、もちろん、コンピューターの評価の基準が、モデルにしているレコードに制限されているからです。だからこそテレビの歌合戦番組の出場者は歌手に似てさえおれば高い評価を受けることになるわけです。歌の中に個人の解釈を入れると、訂正されるか失格となります。先生から訂正されてもかまいませんが、コンピューターに訂正されれば面目が立ちませんね。ここで私が提示したい疑問点は、はたしてコンピューターに語学を評価する能力がどれほどあるだろうかということです。

日本の大学入試には客観テストが主流を占めていることを話しましたが、これを例証する必要はないと思います。みなさんは毎日この種の問題と取り組んでいらっしゃるのですから。今年の入試問題を検討していく中で共通一次のテストが典型的な客観問題だということがわかりました。

受験生はキー・センテンスを与えられます。たとえば、

The man I want to visit is Harold.

(私が訪問したい人は Harold です)

受験生は四つの選択肢を与えられ、その中から同じ意味を持つ文章を選ぶのです。四つの選択肢はこうです。

1. I want to visit Harold.

(私は Harold を訪問したい)

2. I want Harold to visit the man.

(Harold にその人のところへ行ってもらいたい)

3. The man wants to visit Harold.

(その人はハロルドを訪問したい)

4. The man wants me to visit Harold.

(その人は私にハロルドのところへ行ってもらいたい)

この種の問題を解くのに、英語を母国語とする人は持ち前の感と経験の技量を披露できないのです。この場合、日本の受験生と同じように消去法で一つ一つ処理していくしかないのです。そこで先程話しました、知能指数に顕著にあらわれる、機械的な問題解決に戻ってくるわけです。

★ある共通テストの詩

しかし、私は文学に興味を持つ者ですので、今から素晴らしい芸術的発明を披露いたします。この種の問題を解く新しい方法をあみ出しました。詩が生まれることに気づいたのです。詩というのはとても難解なものだという印象があるかもしれませんが、本当は簡単なもので、どなたでも作れます。今年の共通一次のテストから例をとりましょう。キー・センテンスは、

I persuaded Susan to be examined by Harry.

(ハリーに診てもらえ、と私はスーザンに言った)

さて、選択肢に付けられた 1, 2, 3, 4 の番号を取るだけで詩が出来上ります。簡単でしょう。番号を取って四つの文を読んでください。詩が出来上りました。

I convinced Susan that Harry should examine her.

I convinced Susan that *she* should examine *Harry*.

I convinced Harry that *I* should examine Susan.

I convinced Harry that I should examine *him*."

(私はスーザンに、ハリーに診てもらえと言った。

私はスーザンに、ハリーを診てやれと言った。

私はハリーに、スーザンは俺に任せろと言った。

私はハリーに、お前を診てやると言った。)

驚くべきことに、たった四行のなかにあらゆる人間模様が詰め込まれているではありませんか。ここに描かれている想像を絶する豊かな表現 —— 人間の複雑な関係を通して成長していく人間像 —— が理解できなければ芸術家にはなれませんぞ。そこで、皆さんはそれぞれの教室でこの種の客観テストをできるだけ想像力に富む方法で実験なさってはいかががでしょうか。私の場合は「詩」が解決策となりました。

★地獄の受動態

結局、大学入試の核になっているのは、意味を犠牲にして言語を切り刻み、機械的な練習問題にしてしまうやり方だといえます。さらに、教育制度全体の中核をなしていると思われる原因についてももう少しお話ししましょう。中学、高校の教科書を検討してみると、(監修を頼まれることがあるものですから)しばしば能動態を受動態に変換する問題にでくわします。この種の問題は前置詞を選ぶ問題よりもさらに輪をかけて日本の先生にもてはやされているものです。

それにしても、能動態を受動態に変換して何をやろうというのでしょうか。日本でなぜ受動態がこんなにもてはやされるのでしょうか。まず第一の原因は、英語に比べて日本語には受動態が多いことがあげられます。これは、日本語がしばしば主語の省略をすることでくらくらするようです。日本語では主語がなくとも自然な表現になります。この原理をそのまま英語にあてはめて受動態の英文を作ってしまうのではないのでしょうか。英語では普通、主語の省略はしません。主語を書かない場合は特別な理由があるのであって、決して英語が気紛れな言

語だからではありません。考えられる理由が三つあります。

まず、主語を表わさないのは主語がたいした意味を持っていない場合です。たとえば、

The book was published in 1983.

(その本は一九八三年に出版された)

ここで受動態を使った理由は（省略された主語は出版社ということでしょう）出版社を特に明記する必要がないからです。関心は出版年度にあります。この場合受動態を使用しても全く自然な英語となります。

受動態を使う第二の理由は主語が不明のばあいです。たとえば、

My camera was stolen.

(私のカメラが盗まれた)

誰が盗んだのかはわかりませんので受動態にしているのです。

第三の理由は少々込み入っております。というのは文脈や文体と関係があるからです。私たちが客観性を強調したい時には受動態にします。一番いい例は法廷でのやりとりです。裁判所で警官が証言をしているのを聞くと普通よりも受動態が頻繁に使われます。たとえば、

The accused was seen to enter the house by means of the bathroom window at 8: 15.

(被告は八時十五分に風呂場の窓から家に侵入しているところを目撃された)

警官の言いたいことは「私が目撃した」あるいは「目撃者がいた」ということです。しかし、ここで能動態を使わないのは、法廷ではできるだけ客観性を保ち、事実だけを重視するからです。こういうふうには裁判の客観性のために受動

態にする場合があるというのが第三の理由です。こうしてみると、日本語の受動態の使い方と英語の使い方にはずいぶん大きな違いがあるようですね。

さて、私が強調したいことはこうです。日本では能動態を受動態に変える時に、それによって生じる意味、文脈、語法の違いを無視しているということです。たんに機械的な作業だけで受動態にしているのです。先生も生徒もこういう練習問題ばかりやれば、能動態も受動態も全く意味が同じだと考えてもいたがありません。二、三の法則を知ってさえおれば誰にでもできる機械的な作業で受動態にしているのですから。また、奇妙なことに、英語の受動態の作り方は日本語の受動態の作り方とよく似ています。英語で受動態にすれば文節が増えますが、日本語の場合も同じです。日本人にとって受動態にすることは簡単で、おもしろい作業であるようですが、そこに意味の違いが生じることを忘れてはなりません。

さらに二、三の例を、今度は大学入試問題からではなく、高校の教科書からあげてみましょう。これはみんな能動態を受動態にする問題の例です。最初の例は、

We saw Mr. Smith lock his door.

(われわれはスミス氏がドアに鍵を掛けるのを見た)

教科書の解答は次のとおりです。

Mr. Smith was seen to lock his door by us.

この例では受動態を使った理由を全く無視しているのがおわかりですか。最後のby us を削除すれば自然な英語になります。この場合、たとえば、裁判所で警官が証言しているところが考えられます。しかしここでby us を付けることによって受動態の効果が全くなくなってしまうのです。

さて、次の例はもっとひどいものです。

They call the ship the Aurola.

(その船はオーロラ号です)

教科書の解答は、

The ship is called the Aurola by them.

この解答の英文は間違いだとはいえませんが、試験官が考えているような意味にはならないのです。この受身の英文の意味はオーロラ号には二つ以上の名前があるということになります。一つはオーロラ号、もう一つはアラン・ブース号。

第三の例はさらにひどい。右手に見えますのが煉獄でございます。まもなく地獄に到着いたします。

I watched the car go up the hill.

(私は車が丘を上るのを見た)

教科書の解答にはこう書いてあります。

The car was watched to go up the hill by me.

ここではby me が不要だというだけでなく、私には説明不可能な理由で、watch の受動態が不定詞をとることはないのです。すなわち、

Something is watched to do something.

とは言えません。こうしてみると、機械的に能動態から受動態に変えるために、文法無視がおこなわれ、意味だけでなく全体の構文までもが脅かされる

結果になるわけです。私が警告したいことは、言語を機械的に分析しようとするとき大きな落とし穴にはまってしまう危険性があるということなのです。しかし、日本の先生方はあいも変わらず受身、受身、受身で、いっそのこと受身と心中されてはいかががでしょうか。

★拝啓大学教授殿

別のテキストからもう一つ例をあげて説明してみましょう。このテキストの出版社の名前は伏せておきましょう。ただヒントを申しますと、この出版社は国営の巨大な放送網を持っております。N?Kと申します。このテキストは大学教授が書いたもので、入学試験のばかげた抽象性を排除して、英会話を使って英語を教えようとするわけです。さて、そのテキストの文章の中で彼は二人の人物を作りあげました。まり子とボブです。まり子は日本人でボブはアメリカ人。まり子とボブが暇な時間にどんなことをするのかは内緒です。さて、この教授は英会話を通して受身を教えようとしたのです。そして次のようなばかばかしい対話文が出来あがったのです。

MARIKO: Is the idea supported by all historians that America was discovered by Columbus?

BOB: Well, it is still believed by many people, but the idea is doubted by some historians.

MARIKO: Why is it doubted?

BOB: Because America is now thought to have been discovered by some others long before Columbus came.

(まり子：アメリカがコロンブスに発見されたことはすべての歴史家が認めているのですか。

ボブ：そうだね。まだたくさんの人がその説を信じているけれども、そうではないとする歴史家もいるよ。

まり子：そうではないとする根拠は？

ボブ：それはコロンブスが来るずっと以前に他の人がアメリカを発見したという説があるからだよ。）

もちろんこの英文の文法には問題はありません。“some others”という表現には首をかしげますが、それよりもここで問題なのは、教授はこの短い対話の中に七つもの受動態を入れたことです。もしアメリカの若い大学生が、(日本人でも誰でも同じですが)こんなしゃべり方をするならば笑われてしまうでしょう。こんなにまで受身を使って表現することなどないからです。同じ教科書の別の章ではまり子がボブに茶道を教えています。

MARIKO: First, fresh water is boiled like this. It is left for some time.

BOB: I see. what should be done next?

MARIKO: Some tea powder is taken out and put into the tea cup. The hot water is poured like this. Then it should be stirred quickly.

(まり子：まず、このようにしてお湯を沸かします。そしてしばらくの間、冷ましてください。

ボブ：なるほど。で、次に何をしますの？

まり子：茶碗の中に抹茶を入れます。そしてこのようにお湯を注ぎます。それから茶せんで泡が立つまで茶をかきまわします。

もうこれ以上追い打ちをかけたくありませんが、私が申しあげたいことは、こういう表現は英語ではないということです。教授の動機は悪くはありません。抽象的なものを排して、十八歳の学生に興味のある題材を選びたかったのでしょう。しかし、彼は英会話を選んで受動態を教えようとしたのです。その時に英語を母国語とする人なら察知できる意味の変化に気づかなかったのです。

こういうふうに機械的な作業をする時の落とし穴は、意味や文脈や語法を無視した途方もない英語が生まれるということです。それは不自然で、滑らかさを欠き、時には文法にもそぐわないナンセンスな英文となってしまうのです。

★日本人の書いた英作文

先程、能動態を受動態に変換する問題が日本で人気がある理由として、日本語が英語よりも受動態をよく使うことと、受動態に変化させる作業が類似していることをあげました。さらに入試問題で抽象概念がはばをきかせていることも述べましたが、日本人の書いた英文をみると抽象名詞が多いのに驚かされます。日本語の性質として文の主要な概念は名詞にあるといえるようです。だから日本語で抽象的なことを話す場合、抽象名詞がたくさん出てくるのでしょう。これに対して英語では文の中核をなすのは動詞であって、名詞ではありません。先程の教科書から私が不自然だと思う例文を四つあげたいと思います。まず、

1. Mr. Smith was delighted to hear of the birth of our baby.

(スミス氏は私たちの赤ん坊が生まれて大喜びだった)

2. I'm very glad to hear of your success.

(ご成功おめでとうございます)

この文は誤った表現とは言えないのですが、日本に十三年も住んでいますと、これは日本人の書いた英文だということがわかります。英語を母国語とする人ならおそらく、

Mr. Smith was delighted to hear we' ve had a baby.

と言うでしょう。「誕生」という事実は、名詞ではなくて動詞の中で表現するのです。二番目の例文では、

I'm very glad to hear you were successful.

あるいは、

I'm very glad to hear you succeeded.

と言うことでしょう。さらに続けて次の例文を読んでください。

3. I cannot deny the fact that he told a lie.

(彼が嘘をついたのは事実だ)

4. I haven' t yet decided what topic to write about.

(何のトピックについて書くのかまだ決めていません)

ここでも文法的な間違いはありません。しかしわれわれが不自然だと思う点は3, 4のどちらの場合も抽象名詞が余計なのです。3の例文は、

I cannot deny that he told a lie.

と言うのが普通なのです。また、4の例文では、

I haven' t yet decided what to write about.

と言うのです。おそらく、抽象名詞が頻繁に出てきたり、能動態を受動態に変換する問題が日本の入試でなくなるのは、日本人が慣れ親しんでいる日本語の性質が表われているからでしょうが、外国人からみれば、不自然で奇妙な英語と言わざるをえません。

★英語と将棋

さて、ここまで大学入試の全体を総括的にみてきましたが、この入試問題の欠陥を要約するために将棋を例にあげましょう。皆さんは将棋がお好きですか。でも、詰将棋ぐらいはなさったことがおありでしょう。入試問題と英語の関係は、ちょうど詰将棋と将棋の関係に似ています。詰将棋では将棋盤の一隅だけが問題になります。消去法によって機械的または数学的に問題解決を計るのです。さらに、詰将棋では何よりもtactics(戦術)が問題になります。strategy(戦略)はそう問題になりません。つまり、詰将棋の問題を解く場合、全体の戦い方を考える必要はないのです。さらに、詰将棋で大事なことは相手がいないということです。相手がいないところに戦いも対話もありえないのは当然でしょう。あるのはただ自分と数学的問題だけなのです。将棋の棋士を鍛えるために詰将棋は大切な練習だということに異論はありますまい。しかし、これだけでは不十分なのです。詰将棋が上手だというだけでは将棋の名人とは言えないでしょう。一度も将棋をやったことのない詰将棋の名人がいるとしましょう。この人が将棋をやれば五分で負けてしまうでしょう。最後の詰の部分だけしかやることがないのですから。初戦と中盤戦を含む全体の戦略を考えたことがなかったからです。

英語でも同じことがいえます。たしかに、詰将棋が有害だとはいえないように、大学入試問題も有害とは言えないでしょう。しかし、これだけではないことを理解していただきたい。これは英語のほんの一部にしかすぎないのです。だから、入試に合格した人を英語のできる人だと考えるのは、詰将棋の上手な人を将棋の名人だと言うのと同じぐらいばかげたことです。こういう試験で何を計ろうとしているのでしょうか。本当に英語の能力がこんな試験でわかるとでもいうのでしょうか。

★英語教育バンザイ

数年前、NHKの管理職者のためのセミナーに出席しましたが、その時のテー

マは、日本の英語教育の目的についてでした。セミナーでは、日本の英語教育は英語が使える人を作り出してはいないという点では意見の一致をみるのですが、そこに出席していた少なくとも六人と管理職の人たちは、そんな批判は気にせずともよい。大学入試問題は、英語のテストというよりも知能指数や記憶力のテストだということです。そして、この役割を、NHKの英語講座は十分に果しているんだということです。生きた英語など関係ない。入試の第一の目的は知能指数と記憶力を計るものであって、英語はその道具にすぎないと。

アメリカの大学教授はもっと極端なことを言いました。シアトル大学のロイ・アンドリュース・ミラー教授は、『日本語論』の中で日本の英語教育に関する一章を設け、特に大学入試に触れています。彼は文化人類学のことばを借りて、rite of passageということばを使っています。この意味は、日本の大学の入試に受ければ日本社会の一員になれるということです。ミラー教授の主張によれば、こうして六年間受験勉強をしてきて、見事大学入試に受かると、その受験生は社会の一員となるために自我を殺す能力があるという証明になるということです。さらに、こうした自我を殺す能力は日本社会の一員になろうとする者にとっては不可欠の条件であるとまで論断しています。

★日本語だけがユニークなのではない

さて、日本の入試問題がなぜ機械的な作業を重視するのか。そのことをめぐって考えていくと、次のような考えにつき当たります。多くの日本人は日本語が比類なき優れた言語だと思っているようです。たとえば、金田一春彦氏は『日本語』（岩波新書）の中でとてつもない要求をしています。彼は、日本語だけが「ことだま」を持つ唯一の言語であって、他の言語は論理に基づいた機械的作業の結果生まれたものだと言うのです。日本人には腹芸という芸当もできるし、日本語には他の言語には真似のできない幽玄の世界があると。この種の考えは日本人の中に蔓延しているようです。もし金田一氏が、今の受験生と同じ方法で外国語を学んだのであれば、日本語が他の言語よりも優れているという

結論に至ったとしても責めるわけにはいきません。というのは、日本語だけは自然な覚え方で身につけたものだからです。しかし、もし私が日本の受験生の英語学習と同じやり方で日本語を学んでいたならば、おそらく次のような結論に至っていたことでしょう。「日本語は機械的な作業で学ぶ論理的な言語で、単なる消去法によって問題解決が計れるものである。一方、我が母国語、英語はすばらしく繊細な言語で、『ことだま』を持つ唯一の言語だ」と。こういう奇妙な神話は日本の英語教育のあり方から生まれるものであり、さらに、日本人が日本語を学ぶ自然な方法と、英語を学ぶ機械的で不自然な方法との差があまりにも大きいところからくるのです。

★治療法はあるのか

それでは治療法はあるのでしょうか。いや、治療法を考える前に病人自身に自覚症状があるのかどうかを確かめなければなりません。もしNHKの管理者たちやミラー教授のいうことが正しいとすれば、すなわち、入学試験の目的は語学の能力を評価するのではないというのであれば、治療など必要ないのかもしれないかもしれません。知能指数や記憶力や服従を教える理想的な評価方法かもしれない。しかし、一方では、多くの評論家、編集者、政治家、教師は、日本が世界に誤解されていることをしばしば強調します。昨日、國弘氏は「太平洋を架ける橋」という講演の中でコミュニケーションの必要性を強調されました。このコミュニケーションに必要なものは英語だという人もいます。もしそうならば、この入試とそれを支持する教育制度は、その目的を叶えるよい方法とは決していえないでしょう。そしてこの場合、ある種の治療が必要になってきます。

いったい治療法はあるのでしょうか。多くの人は「もちろんある」と答えるでしょう。私が監修したテキストの欠陥は、過去二十年の間に世界で展開された語学教育の教授法に目を向けていないということです。この教授法がどんなものかお知りになりたい方がいらっしゃれば、JALTの会合に出席されてはいかがでしょうか。これは全国英語教師協会のことです。また同時に、外国で

出版された教材をご覧になればわかるのですが、いろんな新しい教授法が紹介されています。まだ実験段階のものもありますが、そこでは退屈な機械的練習を排して、英語力が達成されるようにさまざまな工夫が試みられています。さて、問題はこういう教材がいったい日本の学校で使えるのかということです。もちろん使えるでしょう。それには教師の再教育が必要でしょうが、それはさほど問題ではないでしょう。過去百二十年間を振り返ってみても、日本人は新しい考えや方法を取り入れるのに積極的な姿勢を示したのですから。教師にもできないはずはありません。古い世代に期待はできなくとも、新しい世代の教師がやってくれるはずですよ。やれないはずはありません。治療法は手の届く範囲にあるのです。が、問題は、この治療法を受け入れる姿勢があるかどうかということです。ここでまた、日本の英語教育は日本人が管理しなければならないという頑なな姿勢をとる文部省に話は戻ってくるわけです。過去二十年間における語学教育の教授法の研究成果のほとんどが外国でおこなわれてきたわけですが、いったい外国で出版された教材を日本の学校で使う可能性はあるのでしょうか。これは政治的な判断になってくるのです。

昨年、中曽根首相は広島で、外国人がいなければ日本人はもっと暮らし向きがよくなっていたらと言ったと報じられています。この発言がどれだけ日本の新聞で取りあげられたかのかは存じませんが、日本の英字新聞では、小さな見出しのコメントが載っていただけでした。この発言は韓国人を刺激しました。といいますのも、中曽根首相がこの発言をしたのは原爆被爆者と話していた時のことでした。広島在住の韓国人が、原爆被爆者には日本人だけではなく韓国人もいるのだということを指摘していました。「日本人の中に外国人がいなければもっといい世界になる」という発言は全く不謹慎で国際性に欠ける態度を表わしているといわざるをえません。もしこんな発言をレーガン大統領か西洋の首相がしたならば、中曽根首相の場合よりもっと大きな反響があったに違いありません。

さて、ここでどんな結論を出せばよいのでしょうか。日本人は外国人と一緒に生活するのがそんなに苦痛なのでしょう。日本の学校で外国出版の教材を

使うと一層苦痛が増すのでしょうか。この答は私にはだせません。私が今までお話してきたことはすでに皆さんの頭の中にあつたものでしょう。私はなにも新しいことを述べたつもりはありません。しかし、この現状がこのまま続き、先程とりあげた奇妙きでれつな英語がのさばり続ける限り、受験地獄の火は永遠に消えることはなかろうと思われるのです。